

深江にあった戦争 1

深江塾

かつてこの深江の町には「あの戦争」の傷が深く刻まれた。昭和二十年（一九四五）には米軍のB29爆撃機を中心とした空襲が幾度もあった。当時武庫郡本庄村と呼ばれたこの地の海岸には海軍の軍需工場である川西航空機甲南工場があった。昭和二十年になってからはこの工場を目標とした大規模な空襲があり、深江の町の大部分が爆弾や焼夷弾によって破壊され焼けた。住む家だけでなく村人も多くがその犠牲になった。

当時、本庄村からは幾多の男子が戦地に出征した。終戦とともに村に帰ってきた人もいたが、大陸であるいは南の海で倒れ二度とふるさとに帰ることのなかった方も少なくない。

あの戦争からすでに七十年以上の歳月がたった。戦地に行った人、銃後で戦火に遭った人、戦中戦後の波乱の生活を体験した人もその多くが人生の黄昏のときを迎えている。すでに鬼籍に入られた方の方が多いといえるかもしれない。昭和十年代から二十年代における生活は、戦争抜きには語れない。「老兵は死なず。ただ消え行くのみ」というD・マッカーサーの言葉が有名だが、高齢化した当時を知る方々の記憶や体験談を残し後世に伝えることは有意義なことだと信じる。

本文は、平成二十八年秋から座談会形式で各自に話してもらい深江塾が整理したものが基になっている。正確を期するために、深江塾で同じ話や言葉などを複数の方々から再度個別に聞き取りを行った。

（文責・森口健一、修正・大国正美）

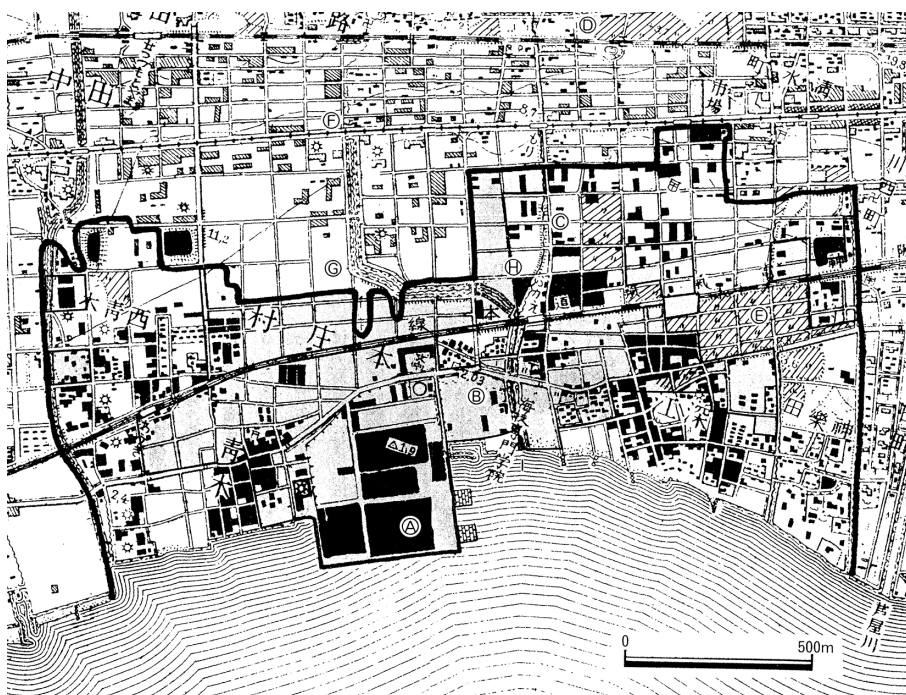


図 深江地区の空襲被害地図（『本庄村史』地理編・民俗編より）網掛け部分が空襲罹災地、斜線は耕地。
A 川西航空機甲南製作所 B 旧神戸高等商船学校（現・神戸大学）

第1話 「この仇はとってやる」

甦る記憶

東京墨田区、両国国技館の側に江戸東京博物館がある。地下一階、地上七階建ての大きな博物館である。江戸時代から現代の東京までの東京都の人々の生活文化の移り変わりを模型と音響で体感できるようになっている。

平成十四年二月、藤本吉江は友人二人とともにこの博物館を訪れた。日本橋の模様の橋を渡り江戸時代を過ぎ現代東京のコナーにやってきた。「東京大空襲と復興」の展示室である。昭和二十年三月十日の米軍B29による大空襲と復興の記録の展示場である。ドアの入り口に立ったとき、「ブォーブォーン」と展示室全体に響く爆音が聞こえた。その爆音を聞いた途端、彼女はそこから前に進むことができなくなった。彼女は友人二人に別れを告げてその博物館から立ち去った。

展示館に充滿する爆音が吉江に昭和二十年五月十一日の神戸大空襲の記憶を思い起こさせたのである。あの日に聞いた爆音の体験からすでに半世紀以上が過ぎていた。空襲体験は子や孫にも話したこともあった。請われて若い人に話したこともある。

しかし、その日聞いた爆音を耳にしたとき藤本吉江は半世紀前のあの日の子供に引き戻されていた。

空襲警報

昭和二十年五月、山本（現姓・藤本）吉江は十歳、武庫郡本庄村の本庄国民学校の四年生であった。家族は七人。父、母と四歳年上で魚崎の女学校（現・夙川学院）二年生の姉、六歳年下で当時四歳の妹の五人で深江の村を南北に通る札場通に面した一軒家に住んでいた。兄二人のうち、上の兄は予科練で西宮の上ヶ原方面にいた。下の兄も志願して軍の幼年学校に入っていた。

本庄国民学校では四月から縁故疎開と集団疎開が始まっていた。吉江も祖母の実家がある大阪の池田方面へ祖母と従姉妹とともに疎開する予定であった。学校では周りの友達が疎開でいなくなる中で、彼女たちも深江を離れなければならない日は明日か明後日かと思っていた。吉江の家の道を隔てた西向かいに「山八」という八百屋店があった。その店のラジオから「中部軍管区、敵機：機編隊が紀伊水道方面から神戸阪神方面に向って北上中」との警戒警報が聞かれた。彼女は警戒警報のサイレンは覚えていない。警戒警報のサイレンの音は、今日の緊急車両のサイレンやあるいは高校野球の試合時に鳴るサイレンに似ている。ウーンと長く音の尾を引くような音である。

店のラジオで警戒警報を聞いてまもなく空襲警報のサイレンが鳴った。その音は、やや間延びした警戒警報のサイレンとは違っている。三ないし四秒間隔の連続音である。ウーウーの音が消えないうちに次の「ウー」がなり始める。その連続音はいかにもせきたてられるような音である（筆者注：これらサイレンの音については二〇一五年八月十五日NHKラジオの深夜放送「録音盤は語る」で昭和二十年二月四日当時のサイレンの音を聞くことができた。体験談によるサイレンの音をこの録音放送で確認した）。

サイレンは深江では本庄国民学校の南にある本庄役場から発せられるようであった。警報が出たときには、隣保の役員をしている父は近所の人々が空襲に備えるべくゲートルを巻き、メガホンを持って伝達のために外に出て不在であった。五月十一日は金曜日で平日でもあり各家にいたのは年寄りや女性がほとんどだったので、父は警戒を呼びかけに廻っていたのである。

姉は四月になってからはほとんど学校に行くことはなかった。昭和二十年の年が明けてからは単機あるいは数機の爆撃機が度々神戸方面にやってきていた。三月には神戸の西半分が大空襲にみまわれて壊滅

状態になっていた。女学校は遠方からも通う生徒もあり警戒警報が発令されてから帰宅ということもできず、自宅待機となっていたのである。吉江も本庄国民学校の生徒の多くが疎開して児童も少なくなりその日は自宅待機であった。

被災して

空襲警報のサイレンが聞こえたので吉江は母、姉、妹の三人と共に自宅の一角、寝室に使っていた和室の床下に掘った防空壕に入った。防空壕は深さ約一畧のただの穴というような代物である。広さは一畳半ほどである。軍隊の野戦において兵士が掘る「蛸壺」の少し広い穴でしかない。

兵士が野戦において掘る塹壕・蛸壺は兵士一人が入れるほどの穴である。銃弾が飛んできるときは頭を下げてその穴に頭を隠す。空襲のときも同様である。爆弾が落ちたとき、人馬を殺傷する破片は爆発地点からやや上方に向かって飛び散る。塹壕に兵士が入るのはその破片による殺傷から免れるためである。よく映画で爆発や銃撃の場面で人が地面に伏せるのはそういうことをあらわしている（筆者注：戦地でいくたびかの戦いを経験した筆者の父から幾度か聞かされた体験談による）。

彼女には壕に入れば、どのように安心かと安全かという具体的ことは判らなかつた。漠然と爆弾は怖いということしかイメージできない。ただ空襲警報があれば直ちに壕に入るといふ日頃からの訓練で体がそう動いた。

「ブォーォーン」という爆音が聞こえる。聞いたことのない周りの空気全体が震えるような音である。その爆音が町全体に覆いかぶさるような不気味さと恐怖を住民たちに感じさせた。彼女は蓋のない壕の中でその爆音を聞いていた。地震のようなゆれと地響きが伝わってきた。吉江たちは両方の目と耳を両手の指で押さえた。そうしなければ

爆風で目が飛び出し、耳が潰れると聞いていたから。爆音と爆発音が入り混じる。近くに爆弾が落ちたのであろうか。

ボタン、ドタンという音が聞こえた。家中のフスマや戸が爆風で倒れている音である。ドタンという音は仏壇が倒れる音であった。家中の物が勝手に動き倒れ壊れた。

地響きをするたびに吉江は無意識のうちに「お母ちゃん、死んだらアカン」と叫んでいた。それは母に向かって叫んでいるだけでなく妹や姉にも向って叫んでいたのである。「死んだらアカン」という叫びは、母や家族への思いもあったかもしれない。あるいは、体の奥底から突き抜けるような恐怖からくる悲鳴とも言うべきものであったかもしれない。

彼女にとって空襲の時間は長かったのか短かったのか思い出せない。ただ早く恐怖から開放されたいという思いだけであった。ちょうど平成七年の阪神・淡路大震災のときに感じた時間感覚であるといえ、それに近いかもしれない。地震の揺れは秒単位であったけれど、ずいぶん長くゆれていた気もする。そんな感覚であった。記録では約十分間の爆撃であった。

藤本吉江には納多ヒデという母方の叔母がいた。納多ヒデは祖母の納多リウやいとこたち三人と一緒に暮らしていた。叔母の家は藤本の家から札幌通を西に渡って数十畧離れたところに住んでいた。いとこは十一歳の女の子、十歳、七歳の男の子の三人である。

十一日の午前、空襲警報がなると同時に叔母はすぐに行動を起こし、共同壕に避難したのである。共同壕は、叔母の家から南東の海岸に近い場所にあった。共同壕は隣保の人たちの共同作業によって作られた比較的丈夫な壕であった。叔母の家には男手がなく壕を作る作業には参加することができなかった。叔母は、そのことをずっと近所に対して負い目を感じていたようであったと吉江は述懐する。

叔母は一番幼いところをかばいながら3人をつれて壕に向かった。壕のそばまで来たとき叔母は、いとこたちに言った。「さあ、ここに入ってもらいなさい。おばあさんを迎えに行つて後から一緒に来るから」と。共同作業に参加できなかった負い目がある壕に入らなかったのであらう。これが、いとこたちが自分たちの母の姿を見た最後であった。いとこたちが壕に入ったとき、すでにその真上の空にはB29の姿があった。

娘たち三人を残して祖母を迎えに行こうと上空を見上げたとき、近くで爆弾が破裂した。二五〇キ爆弾である。川西航空機甲南工場を破壊するための炸裂弾である。地上で破裂すれば地面には直径数センチの穴ができるといわれる代物である。



写真1 阪神電車北側に残った爆弾の跡

は、子どもたちが入っている壕の入り口のそばまで叔母の体を吹き飛ばした。炸裂弾は強烈な爆風を伴い、同時に破片を回りに吹き飛ばす。その破片が周囲の人馬を殺傷する。破片の切り口は日本刀で一刀のもとに切ったような断面となる。その破片は叔母を吹き飛ばすと同時に、その顔をまるでスイカを半分に切るように切り裂いた。

爆発がおさまった時、恐る恐るいとは外を見た。人が倒れている。手足がかすかに動いているようにも見えた。周りの大人がすぐに子どもたちを制して見ないようにした。子どもたちは倒れている人がまさか自分たちの母だとは思わなかった。

壕の周囲が大人たちの手によって、なんとなく片付けられたあと、いとこたち三人は藤本吉江の家に向かってきた。三人は泣きながら「お母ちゃんとおばあちゃんがいらない」と言った。それを聞くなり吉江の父は叔母の家に向かって走った。

家の裏口から東に、いとこたちが入っていた壕の方向に向かって十メートルばかりの路地がある。路地の入り口を入ろうとしたときおばあさんが倒れているのを見た。祖母である。地面には血が流れている。父が駆け寄った。叔母の腹部からは腸がはみ出している。生きているとは思えないが、父はおばあさんの腹からはみ出した腸を手でもう一度中に戻そうとした。生きかえるはずもない甲斐のない行為であった。しかしそれでもしなければ何をしてよいのかどうすればよいのか彼にはわからなかった。ただ、もう一度、普通の姿に戻したかったのだ。

どこで手に入れてきたのか、誰が作ったかは分からなかったが、二つの棺桶が並べられた。藤本の家から大八車に棺桶を乗せて本庄国民学校へ運んだ。学校の東門を入ったすぐに東校舎があり、そこに吉江が学んでいた口組の教室があった。二つのひつぎはその教室に安置された。

翌日、国民学校のすぐ北の阪神電車の線路を渡ったところの本庄墓

地に行った。
少しの空き地
で二人の遺体
は焼かれた。
寄せ集めの木
材のせいか遺
体はなかなか
焼けなかつ
た。まるで子
どもたちを残
して彼岸に行
くことを拒ん
でいるようで
あった。まわ
りで鳴咽が上
がる中で、吉
江は思わず声
を上げた。
「この仇は
とってやるか
らな」。

第2話「深江に戻ってみれば」

授業を切り上げて

昭和二十年五月十一日朝、寺田（現姓・北村）光子（当時十四歳）
はいつものように阪神電車で深江駅から住吉駅に向った。住吉にある
青年学校に行くためである。

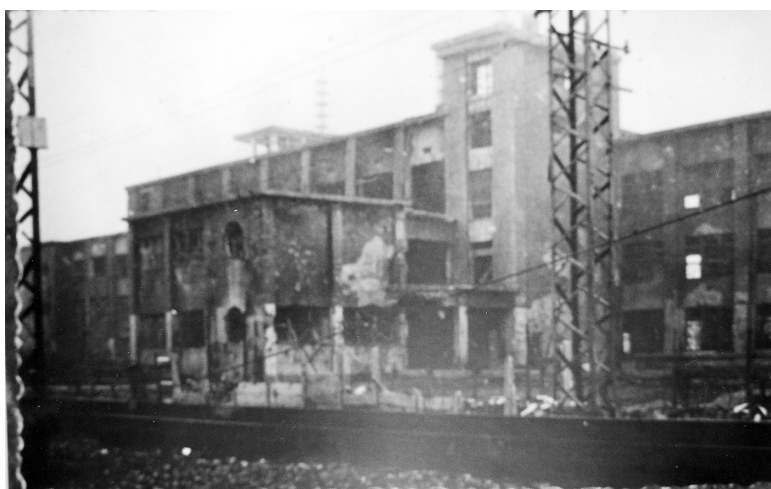


写真2 被災した本庄国民学校

午前中の授業の最中に空襲警報があった。事前に警戒警報はなく、いきなり警報が鳴った。光子たちはクラスの仲間と共に校庭にある防空壕に駆け込んだ。その壕には十人ほどが避難できる広さがあった。壕というものの民間人によって掘られたもので、入り口は戸板でしかないが、ともかく壕に入るといことはひとまず安全という気持ちにはなれた。

昭和二十年になってからは、数日おきに神戸の南のほうからB29が単機あるいは数機でやってくるようになっていた。神戸の西のほうはすでに大規模な空襲で大きな被害を受けていたことは聞いていた。空襲による爆弾の怖さは実際には体験していないけれど、相当ひどいものであることは想像できた。

光子は壕の中で爆音を聞きながら「今日はいつもと違うのではないか」と思った。爆音が単純な音ではなく空一面に広がるような音が徐々に近づいてくる。爆発音が聞こえる。遠くで聞こえていたその音がだんだんと近づく。突然、地響きと共に爆発がおきた。校庭に爆弾が落ちたのだ。光子たちの入っている壕の側にバサ、バサと木の枝が落ちてくる。爆弾の破片が校庭の端にあった桜の木の枝を切り裂き、爆風がその枝を吹き飛ばしていたのだ。

空襲警報が解除になって光子らは壕から出た。壕の側には人の腕ほどもある枝が転がっていた。強風でちぎれたものではなく鋭い刃物で一気に切り裂かれたものであることが判った。もしその破片が人間に当たっていたらどうなっていたかを思っただけで自分の身が切り裂かれた気がした。

教員の指示によって授業は中止となり帰宅することとなった。徒歩で我が家に向かう光子は学校からいったん南に下り、阪神住吉駅付近まで来たが、電車が動いている様子がない。電車沿いの道を東へ、深江方面に向って歩き始めた。深江の自宅まで歩いて一時間ほどであ

る。毎日見慣れた電車沿いの町があちこちで潰れている。火災が起きていないのが幸いである。

住吉川を越えたところで、行く手になにやら叫びながら歩いている女性が見えた。近づくにつれて女性の様子がはっきりとくる。素足である。衣服のあちこちが破れている。破れた服のあちこちに黒いしみのようになった血が付いている。全身を土ぼこりが被ったような、また粉をまぶしたような髪の毛がその顔をばさりと覆っている。頭の傷から流れた血が髪の毛についていく筋かの毛が顔に張り付いている。魂が抜けたようなというのはこのような様子を言うのであろうか。何かに押されるようにあるいは何かに引かれるように歩いている。突然「…ちゃん」「…」と叫ぶ。光子はその叫びを聞いて胸つかれる思いがした。「この人はわが子の名を呼んでいるのだ」「この人の子供がいなのだ」「死んだのであろうか」、さまざまな思いが胸をよぎる。それ以上、その女性に近づくことができず、うつむいてその女性が視野に入らないように通り過ぎた。後ろで「…ちゃん」と呼ぶ声が聞こえる。いつまでもその声が耳に残った。

血に染まる老木

青木の駅の北を過ぎた。駅を過ぎた東側の深江駅寄りに電車が止まっている。だれも乗っていない。電車を右手に見てさらに深江の方に歩く。電車沿いの北側にある近隣の村の共同墓地が見えてきた。墓地は西が旧青木村、中央が旧小路村、道を挟んで東側が旧深江村の地区とおおむね区割りされている。西地区の青木の墓地と、東の深江墓地にはいつ、誰が植えたのかその由来がわからないクスノキの老木が一本ずつあり、年中緑の葉を繁らせていた。墓地に近づくにつれ、クスノキの葉の色が変色しているのが分かった。黒ずんでいる。枝には衣服の切れ端がぶら下がっている。木のそばまで来たとき、葉が黒ずんでいるのは血しぶきで葉っぱが染められたとわかった。

後で聞いたことであるが、墓石の陰に避難していたのであろうか、至近弾をあげたのであろう人が、吹き飛ばされその体もバラバラになってクスノキの枝にその手足がぶら下がっていたという。ちぎれた手足から流れ出た血がクスノキの緑の葉を赤く染めたのだ。時間がたって血潮の色が黒く変色したのである。

墓地を抜けようとして線路のほうを見た。馬が倒れている。手足もあるし頭もある。血が流れている様子もない。けれど仰向けになっただま動かない。恐る恐る少し近づく。馬の体には目立った傷はないけれどその腹は異常に膨らんでいる。パンパンに張り詰めている。顔を見る。カッと目が開かれている。

「馬は仕事をしていたのだろうか」「壕に入ることもできず外に置かれたまま空襲に出くわしたのだろうか」と光子は考えた。さらにただひたすら働き続け、空襲という人間がもたらす災難に避難することもできず、無残な姿をさらしているもの言わぬ馬が哀れであった。

倒れ横たわった馬の向こうに母校の本庄国民学校の校舎が見える。

この校舎は、昭和十二年に新築された鉄筋コンクリート建ての本庄村自慢の校舎である。竣工したときには新聞でも「白亜の校舎」として紹介された。海岸近くの本庄村が昭和九年の室戸台風の強風と高潮による被害を受けた教訓をもとに新築されたものである。

村人にも児童たちにも自慢の白亜の校舎が、爆弾の直撃や至近弾のため焼けただれている。窓という窓は皆そのガラスが吹き飛んでいる。校舎も全身が傷ついているのだ。何年もここで学び遊び思い出をいっぱい作ってくれた、思い出詰まった母校がやけどを負い傷だらけになっている。光子はじっと立って校舎を見つめた。

校舎のテッペンには、新築当時の岩谷省三校長が「本庄で学ぶ児童の教育の指針」として建てた「五輪の塔」があった。爆風にもめげず空に向けて立っている二本の塔を見たとき涙が止まらなくなっていた。



写真3 ガラスは吹き飛び焼けただれた「白亜の校舎」



写真4 本庄国民学校の西側辺りは焼け野原だった

青木から深江に近づくにつれて、空襲の被害は目立ってきた。

昭和二十年当時、深江の町は阪神電車より北には田畑が広がる田園風であった。集落は電車道より南に向って海岸の方に集中していた。深江の駅に近づくにつれそれらの住宅が破壊されているのが目に付くようになった。

札幌通という深江の南北の通りと旧国道・新道が交わる近くまで来た。我が家はもうそこである。付近の被害の状況をみるにつけ自分の

家がどうなっているか気がかりであった。

知人に会った。「○○さん、うちの家どうなっているか知りませんか」と聞けば「あんたとは大丈夫やっみたいよ」と教えてくれた。その人は「浜のほうに爆弾がいったい落ちた。谷さんの家は全滅や」という。

その人はさらに、話を続けた。谷さんとは谷角三氏のこと、当時深江の主力産業であった鰯の加工場の経営者の一人であった。加工場は「イリヤ」と呼ばれていた。イリヤには浜で採れた鰯を大釜で煮る

ためのカマドがある。カマドは加工場の屋内にあり、床をおよそ一畳掘り下げた深さがあった。掘り下げた周りをモルタルとレンガで固めた壁がある。釜を乗せる部分以外にもモルタルで固めてある。少し無理をすれば焚口を入り口として数人が入れるほどの広さがあった。

その日、空襲警報がなったとき家族は皆その壕に入った。ただ主人の谷氏と長男は所用で家にはいなかった。三十歳の谷氏の夫人と、十五歳の長女、四歳の次女の家族。たま谷さん宅に来ていた叔母さんの女ばかり四人がカマドの壕に避難した。

壕の入り口に爆弾が落ちた。

ほぼ直撃弾である。空襲が終わった後、近所の人たちが崩れたカマドの壕を掘って助け出そうとした。爆弾が間近で破裂した割には壕そのものは大きな損傷はないようであった。掘り下げた構造がよかったのかもしれない。

しかし、爆風は入り口からフィゴの風のように猛烈な勢いで壕の中に吹き込んだ。谷さんの奥さんは内臓が飛び出ていた。長女のさよさんはほっそりした女の子であったが、風船を膨らませたように体全体が膨らんでいた。四歳の次女は、顔は別段傷も付いていないようであったが、頭の後半分が鋭利な刃物で切り取ったようになくなっていった。叔母さんは右の耳が消えていた。

我が家に帰り着く

谷さんの壕から光子の家は大きな声で呼ば聞こえるほどの近さである。「自分の家や家族は無事であろうか」と駆け出した。家が見えてくる。朝、青年学校に行くときに出了たままの家が見える。住吉の学校から深江の我が家にたどり着くまでに見てきた風景、瓦礫となった家々を見てきた彼女の目にはいつものように、当たり前のように、そこにある我が家がなぜか懐かしくいとおしく思えた。

飛び込むように家に入ると母と祖母は無事であった。二人の無事を確認すると彼女は浜に駆け出した。浜辺に着くとちょうど父の寺田豊吉が船から降りてきたところであった。

父は朝早くから漁に出ていたのである。船には船頭である豊吉と岡山の日生から出稼ぎに来ている三十歳の男性が乗り組んでいた。

朝早くからの漁を終えて深江の浜に帰ろうとしたとき、南のほうから船を追いかけるように上空を幾つかのかたまりになったB29爆撃機がやってきた。

豊吉は上空を見ながら「今日はいつもとちがう」と感じていた。「神戸の西がやられた」と聞いていたが「今日は深江の川西航空がやられ

る」と思った。

あっという間にB29の編隊が上空にやってきた。空から見れば小さな漁船である。「まさかこの船をめがけて爆弾を落とすことはなからう」と思いながらも豊吉は船をジグザグに操りながら浜を目指した。

沖からは深江の空いっぱいひろがった米軍機が、次々とその機体の腹から爆弾を投下するのである。今にも自分の船にも爆弾が落ちてきそうな気がする。ゆく手の海の落ちた爆弾は十人以上もあろうかと思われる水柱を立てる。陸ではオレンジ色の光が閃くと次にはドンという音がする。自分の家の近くにも爆弾が落ちていくようであった。しかし沖に出て毎日のように漁場で見立てをしている豊吉は沖合からみて自分の家に直撃弾はないと確信していた。それでも青年学校に行っている娘の光子のことが気になった。

空を覆っていた米軍機は六甲山に沿うように機首を北東のほうへむけて去っていった。豊吉はあれほどの爆弾が落とされたのに深江の集落に大きな火災が起きていないのに不思議な思いを抱きながら、船を深江の自宅前の浜辺に着けた。

ここ数日にはない大漁とも言える漁であった。底引き網を入れた漁でカレイが船のイクスにあふれていた。

船を浜につけると同時に娘の光子がやってきた。駆けつけてきた娘を抱きながら父は聞いた。「家は大丈夫か」「お母ちゃん、おばあちゃんは大丈夫か」と聞いた。光子は住吉の学校から父の船のそばまでやってくる数時間に見聞きしたことが恐怖心と共に甦ってきた。

声にはならなかった。ただ涙がポロポロと落ちるばかりであった。

◇

第一話は、藤本吉江氏（昭和十年深江生まれ）、第二話は北村光子氏（昭和六年深江生まれ）の体験談をもとに森口健一が作成、飯田一雄、松下芳子、増田行雄の意見をもとに大國正美が修正を加えた。